

あいちシンクロトロン光センターの10年とこれから

10 Years of Aichi Synchrotron Radiation Center and its Perspective

竹田美和

あいちシンクロトロン光センター

takeda@aichisr.jp

キーワード：あいちSR、10周年、前史、これから

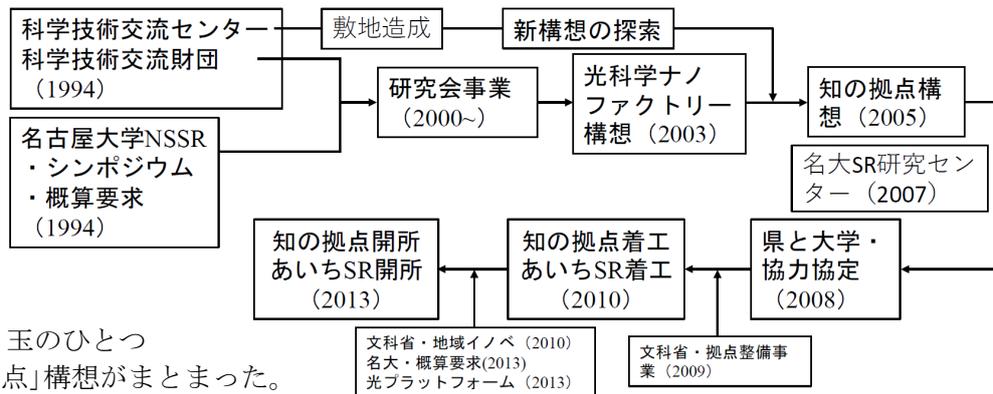
あいちシンクロトロン光センター（以下あいちSR）は、2013年3月22日に開所式を行い、翌週26日から6本のビームラインで共用を開始しました。2013年度の利用時間4,283時間は2022年度には10,000時間を超え、その間、利用機関数が92(68:2014年度)から178となり、利用料収入は3.7倍となりました。当初6本のビームラインは12本に増えましたが、ここ2、3年は利用可能枠を超える応募状況が続いています。

あいちSRがどのような経緯で建設されるに至ったか（その経緯が運営方針を決めます）、主要な点を掲げて説明します。共用開始後もたゆまぬ改良がありますが、それがどのように進められ、どのように変遷して来たかについて記します。最後に今後の展開について願望を述べます。

前史 20年

あいちSRの建設に至る流れは2本あります。そのひとつは、愛知県科学技術会議の答申を受け、産学行政連携による研究開発の拠点として科学技術交流センターを設置するという流れであり、もうひとつは小規模で使い勝手の良い放射光施設を設置したいという名古屋大学のプランです。その合流があいちSRのみならず「知の拠点あいち」の全体構想となって実現されました。

図1 科技財団の研究会事業での産学行政間の相互作用が光科学ナノファクトリー構想に至る。これを基にあいちSRを目玉のひとつとして「知の拠点」構想がまとまった。



あいちSRの10年

共用を進めると6本のビームラインではカバー出来ない点や、ビームラインに不足する機能、4時間単位でユーザーも測定対象も変わるあいちSRの運用に堪えない装置も明らかとなり、図2のようにビームラインの増設や高度化が進められてきました。ユーザーの声をよく聞くことが非常に重要です。

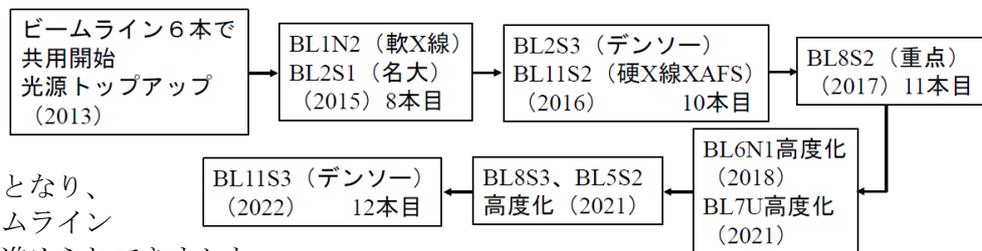


図2 ビームラインの増設と高度化

あいちSRのこれから

何より、溢れるユーザーの要望に応えることがまず喫緊の課題です。それには、ビームラインの増設/スクラップ&ビルドが必要です。類似装置を持つ他施設との連携も強化すべきです。いずれも資金の裏付けが必要で、各界の協力が、発足当時のように得られるよう望むところです。